

はじめに



今回私は、代々木体育館及びその周辺におけるランドスケープを再構成するため、都道 413 号線の原宿駅から代々木交差点までの地帯（上図、以下都道 413）においての設計を行った。この都道 413 は表参道・井の頭通りと接続しており、代々木体育館をはじめとして、代々木公園・都立代々木競技場・明治神宮といったパブリックスペースにアクセスするおよそ 1000m の道である。

丹下健三のランドスケープデザイン

都道 413 の南側にある代々木国立屋内総合競技場（以下、代々木体育館）は吊構造の屋根とともに、15,000 人の観客を捌くための優れたランドスケープデザインで知られている。



まず駅から近く、より多くの人が利用する原宿駅側に、メインとなる第一体育館が置かれ、渋谷駅側にサブとなる第二体育館が置かれた。第一体育館は巴形、第二体育館は渦巻型の形を取っていて、この形状により、完全に閉じた円形と違い、内から外、外から内へと広がりを持つ空間が生まれているのである。二つの体育館は、人の動線を立体的に操作する役割も持つ連絡棟・付属棟による東西軸を挟んで置かれ、全体の配置が決定している。（左下図）

現状

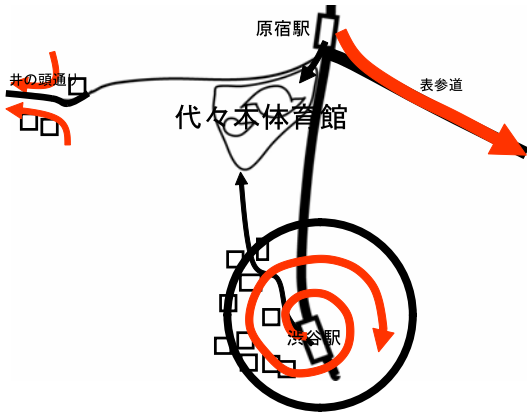
流れるようなランドスケープデザインを持つ代々木体育館であるが、周辺環境の変化によってその優れたランドスケープが持つ魅力は半減している。都市から内部に流れるようにつながっていた動線は柵によって途切れ、完全に閉ざされている。（下写真）



敷地内部へ入ると建設当時と大きく代わることのない空間があり、代々木体育館を臨む気持ちのよい道となっているが、柵によって非常に入りづらい雰囲気になっており、イベント時以外の人通りはほとんどない。

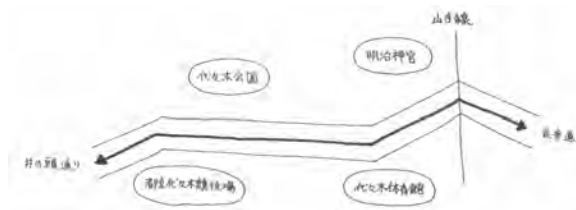
さらに、渋谷駅周辺に目標物となる建物が多く出現して来ると駅周辺で街が完結し、表参道も発展してくることで人々の意識は

代々木体育館に向かなくなった。近年では井の頭通りも発展してきており、街の中の代々木体育館の存在はさらに小さくなっていくと考えられる。(下図)

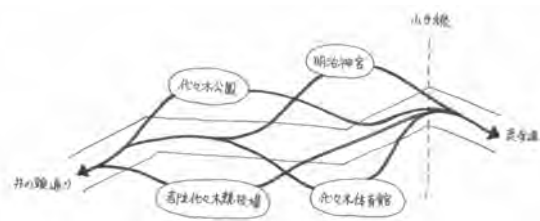


設計方針

以上の事柄を踏まえ、代々木体育館のランドスケープに置く魅力を再構成し、都道 413 周辺を豊かな道空間とすることを目標として次のような方針で設計を行った。



個々のポイントが独立して存在し、井の頭通りから表参道への通過交通となっている都道 413



分散しているポイントをつなぎ、同時に一体的な道空間として形成する

都道 413 を「パブリックスペースが付属する道空間」として計画し、「ファッション街として賑わう表参道」「住宅街やオフィスを持つ井の頭通り」という二つの通りから人の流れを誘導することで、代々木体育館や代々木公園などのパブリックスペースが持つ都市における憩いの場としての機能を強め、各々の地域のブラ

ンド力を更に高めるための設計を行う。さらに、魅力的な道を形成するために代々木体育館を巻き込むことで、代々木体育館のランドスケープの再生を図る。これを実現するため、次のような 3 つのポイントを設定した。(下図)



- ① 井の頭通りと都道 413 の接続ポイント
- ② 代々木体育館、代々木公園、都立代々木競技場に挟まれたポイント
- ③ 表参道と都道 413 の接続ポイント

ポイント①において井の頭通りやその周辺住宅地の意識を都道 413 へと向ける。ポイント②においては代々木体育館と代々木公園・都立代々木競技場という分断された 3 箇所のパブリックスペースを繋ぎ、一体的利用を試みる。ポイント③では原宿・表参道の賑わいを延長させる

これによって、表参道→都道 413→井の頭通りへと流れるような道空間を目指す。

ポイント①谷の道

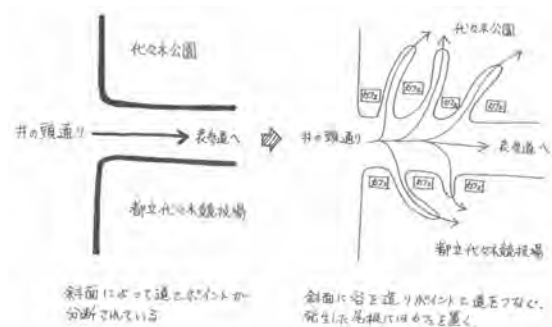


ポイント①では、都道 413 は谷底を通る道のような雰囲気を持つ。(左写真)

井の頭通りからみると都道 413 は代々木公園への唯一の入り口であるが、車・歩行者ともに、表参道への流れが強く、代々木公園などへのアクセス機能は弱い。つまり停滞や回遊生を持たないただの通過路となっている。

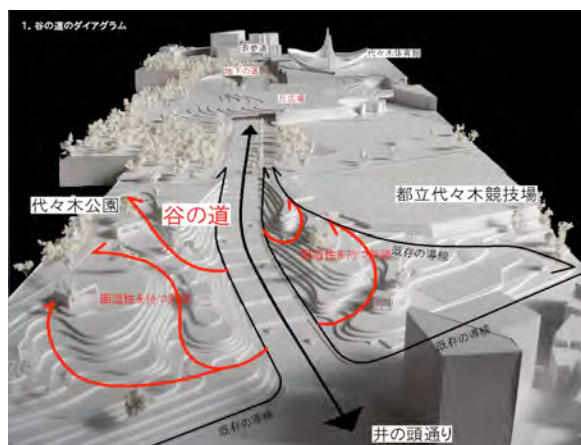
そこで斜面によって代々木公園と分断されていた既存の動線と、代々木公園や都立代々木競技場といったポイントをつなぐために谷の道

を設計した。(下図)



谷の道は代代木公園内の遊歩道と連続し、回遊性の高い空間となっており、代代木公園側と都立代代木競技場側は、都道 413 を挟んで対称性を持たせることで景観の統一化を図っている。谷を作ることで発生した尾根にはカフェを置き、ポイント①の一角が憩いの空間となるようイメージした。

代代木公園や都立代代木競技場内に誘い込むような動線を作ることによって、井の頭通りからの人の流れを産む計画である。(下図)



ポイント② 丘広場



ポイント②は代代木体育館の駐車場や都立代代木競技場の屋外ホールがあり、視界が開ける地点であるが、代代木体育館の柵で分断されており、都道 413 によって代代木公園とも完全に分割されている。平日は閑散としているが、立地が良いため仮設のイベント会場が建てられることも多い。(上写真)

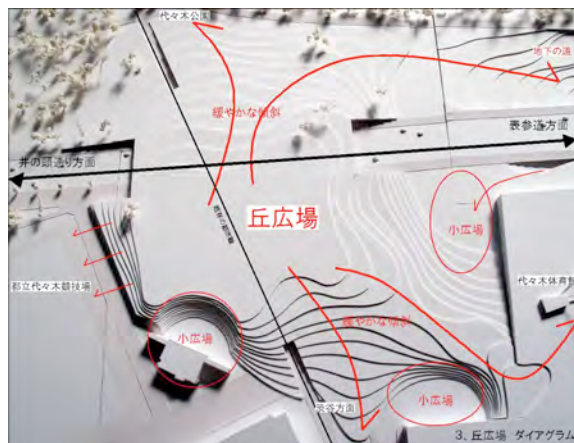
あるが、代代木体育館の柵で分断されており、都道 413 によって代代木公園とも完全に分割されている。平日は閑散としているが、立地が良いため仮設のイベント会場が建てられることも多い。(上写真)

この場所では代代木体育館・代代木公園・都立代代木競技場というパブリックスペースを一体的な公園空間にしたいと考え、なだらかな丘を作り、広場をおくことを考えた。(下図)



丘は今回設計する地下の道と代代木公園・代代木体育館・渋谷方向に向かって緩やかに傾斜する。さらに丘の傾斜によって屋外ホールの座席と都立代代木競技場への眺望を確保、新たに小広場を形成した。

この丘広場によって代代木公園・代代木体育館・都立代代木競技場という分断されていたパブリックスペースがつながり、代代木体育館においては、今まで裏側であった部分に新たにエントランスが生じ、新しい空間の流れが作られると考えた。(下図)



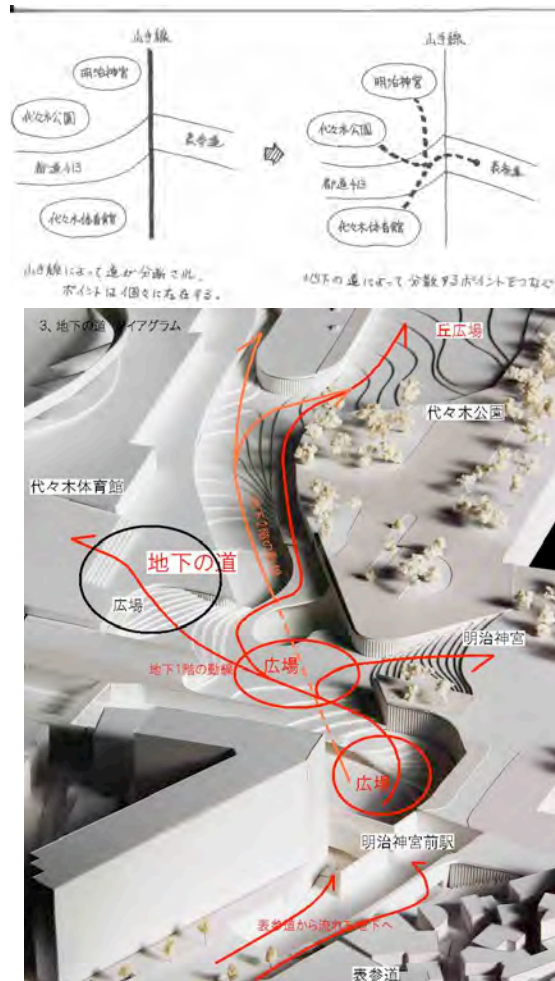
ポイント③ 地下の道



ポイント③は、表参道の終わり、あるいは原宿駅への入り口として認識されている場所であり、交通

量の多い車道と山手線により歩行者の流れは切れている。代々木体育館側の都道 413 へは目的がない限り意識も向かない。(前頁写真)

このポイントでは地上で流れを作ることが難しく、地下の道を計画した。この地下の道によって山手線によって分断されていた表参道と都道 413 をつなぎ、分散していたポイントを集約する。(下図)



代々木公園内から緩やかに動線を傾斜させ山手線の下を通し、ポイント②に作る丘



へと流れこむような空間をつくる。また、代々木体育館・明治神宮といったポイントからも動線を計画し、表参道へは、表参道の真下にある明治神宮前駅と地下の道を接続させ、原宿駅前の島式の路側帯がある場所を利用して、表参道から明治神宮前駅へ動線を下す。さらに地下広場を設け、代々木体育館原宿側のエントランスとなっている広場空間との一体的な利用を構想している。(左下図)

全体計画

以上のような谷の道、丘広場、地下の道という新要素を挿入することで、代々木体育館・明治神宮・都立代々木競技場・代々木公園という既存の要素を都道 413 の一部とし、都道 413・表参道・井の頭通りを連なりながらも空間変化が味わえる道空間として構成する。(同頁下図)

まとめ

丹下健三による設計は街の中に一つの軸を見出し、ゴールとなるシンボルを置くものであったが、現在の代々木体育館周辺には表参道・井の頭通り・代々木公園・明治神宮など様々な要素があり、複数の軸が存在する。

今回の設計では目標物となるシンボルを造るのではなく、存在する様々な要素を取り入れた「場」を作り、そこに代々木体育館を巻き込む。それによって代々木体育館自体を「場」として再生し、人に使わせることで近代建築の遺産として、代々木体育館を残していくことを計画している。